

な  
ら

民俗通信

西村 博美

□265□

## 猿沢池のはなし

文

化

▼龍之介の「竜」  
芥川龍之介が『今昔物語』や『宇治拾遺物語』をもとに、多くの「王朝物」といわれる歴史小説を書いていることは、よく知られている。

奈良に住まいするある僧が、「三月三日」の池より竜昇らんとするなり」という立て札を建てたという話は、『宇治拾遺』(巻十一の六)にもある(『藏人得業』(くろうどくこう)猿沢の池の龍の事)。

芥川は、せいぜい八〇〇字ほどの「原話」を下敷きにしながらも、たっぷりと楽しませる物語に仕上げている(『竜』、新潮文庫など)。「鼻おほきにて、赤かりければ、『大鳥の藏人得業』」とあたなされ、人からは多少軽く見られていたらしい恵印法師の、ちょっとした悪戯(こ)ろは、思わず混乱をもたらす。

『拾遺』には、「大和河内、和泉、摂津の者まで、きつたべて、つひあひたり」とある



猿沢池（撮影・安田藤四郎）

## 語り継がれた竜、采女

猿沢池の名は、天竺(てんじく)インドの古称の獮猴池(びこうち)から取られており、もともと興福寺の放生(ぼうじょう)池であった。魚が七分に水三分、とうたわれて、池底が龍宮に通じるとも伝わる。

芥川も「竜」の話で、宇治大納言隆国に「昔は天が下の人間も皆心からが住むと思つておつた」

らうかがうことができること、女性の生活は、宗

教の匂いが豊かで、神事にあづかった者の物語か

ト(的)とマル(円)、カツグとカルフ」などの例を挙げて叮嚀(ていねい)に説いている(『神々の世界』一九六九年)。

猿沢池のほとりに、采女の筆谷良造は、「幸(サチ)の神——イナキ論」の中で、「猿沢池(サルサハ)もまた、もとは「サチ(幸)のサハ」／「サツサハ」で、「サハ」は古代ではミソギの場を指す語であつたと筆谷は言う。奈良で育つた筆者(西村)などは、「中秋の月見の晩に猿沢の池に手足を浸す

小学館)。采女神社は春日大社末社の一つで、祭神は事代主命(ことしろぬしのみこと)であるが、入水し采女を祀(まつ)るとある。社殿はなぜか西向きになつていて、水木要太郎(十五堂など)は、「采女自身が」命を落とした水面を見るのは恨めしいとあって、一夜の中にクルリと西向きになつてしまつたのだ」と言つてゐる(『奈良勝地漫画』一九三五年)。奈良で育つた筆者なども、そのように聞かされきた。しかし、鳥居だけはもとのまま、池に向かつて建つてある。

名月の宵の采女祭りは、竜頭の舟から花扇を池に投げて、采女の靈を慰める。池のほとりを流れる率川(いさがわ)も、春日山に源を発する「サチ流れ降る川」であったといふ(『筆谷前掲書』)。ひよとしたら、その采女もまた仕えた人のミソギに、水をつける人ではなかつたか。まことに根拠のない筆者の妄想だが、よど氣をつけないと語らせてはいるが、今もと語らせてはいるが、今も天が下の人間も皆心からがいた。ある時、帝はそこの采女をお召しになつた。ところが以後、二度とお召しがなかつたのが、よど氣をつけないと見落としそうな率川をまた橋の下に地蔵が満載された舟形の石を見ながらそんなことを思つてゐる。

筆谷は「(筆谷)がサルになるのは、音化で、古語ではしばしば起こる音韻現象」であるとしながら、マ

れども興福寺の放生(ぼうじょう)池であった。「魚が七分に水三分、とうたわれて、池底が龍宮に通じる」とも伝わる。

芥川も「竜」の話で、宇治大納言隆国に「昔は天が下の人間も皆心からが住むと思つておつた」

らうかがうことができること、女性の生活は、宗

教の匂いが豊かで、神事にあづかった者の物語か

筆谷は「(筆谷)がサルになるのは、音化で、古語ではしばしば起こる音韻現象」であるとしながら、マ

れども興福寺の放生(ぼうじょう)池であった。「魚が七分に水三分、とうたわれて、池底が龍宮に通じる」とも伝わる。

芥川も「竜」の話で、宇治大納言隆国に「昔は天が下の人間も皆心からが住むと思つておつた」

らうかがうことができること、女性の生活は、宗

教の匂いが豊かで、神事にあづかった者の物語か

らうかがうことができること、女性の生活は、宗

教の匂いが豊かで、神事にあづかった者の物語か

らうかがうことができること、女性の生活は、宗

教の匂いが豊かで、神事にあづかった者の物語か

らうかがうことができること、女性の生活は、宗

教の匂いが豊かで、神事にあづかった者の物語か

らうかがうことができること、女性の生活は、宗

教の匂いが豊かで、神事にあづかった者の物語か

らうかがうことができること、女性の生活は、宗

教の匂いが豊かで、神事にあづかった者の物語か